

Special Support Education Research Center

SSERC 通信

(第3号 2006年12月)

国立大学法人 筑波大学
 特別支援教育研究センター
 センター長：前川 久男
 〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1
 TEL：03-3942-6923/FAX：03-3942-6938
<http://www.human.tsukuba.ac.jp/sserc/>
 mail：sserc@human.tsukuba.ac.jp

【巻頭言】

「最前線・最新の情報提供を目指して」 前川 久男

本年度の研究事業の一つとしてeラーニングの実験的な配信を北海道、沖縄等と行い始めました。限られた人的資源と資金を効率的に使用し特別支援教育を支えるものとなることを期待して開始したプロジェクトです。またこのeラーニングのシステムが学校をつなぎ、相互交流が始まることも期待されます。全国のより多くの学校、人材ネットワークの場へと発展していけると、センターの連携機能を支えるものとなるでしょう。さまざまなこれまで培われてきた具体的なコンテンツをセンターから全国へ発信できることを夢んでいます。この12月23日(土)開催予定の「特別支援教育の最前線(5)」も八重山養護学校を会場に附属小学校講堂から配信予定になっています。私たちが障害のある人々の情報保障を大切にしているのと同じように、どのような地域に住んでいても同じように特別支援教育の情報にアクセスできることを大切にするセンターでありたいと思います。



【報告】

平成18年度現職教員研修、前期研修成果報告会・修了式・中間報告会



現職教員研修修了

9月29日(金)、第1会議室において、今年度の現職教員研修前期研修成果報告会が開催されました。9月で研修を修了する勝部悦弘さん(静岡県立浜名養護学校)、矢野清美さん(広島県立廿日市養護学校)、そして筑波大学研究生の蛭原けい子さん(茨城県立霞ヶ浦聾学校)の3名が6ヶ月間の研修成果を報告しました。また、1年研修を行っている4名の研修生は、それぞれ中間報告を行いました。研修修了生の研修テーマは以下のとおりです。

「静岡県袋井市、湖西市における支援体制に関する調査研究」

静岡県立浜名養護学校 勝部悦弘(指導教員 前川久男)

「小学校通常学級における児童の教育的ニーズに関する教師の気づき」

広島県立廿日市養護学校 矢野清美(指導教員 安藤隆男)

「聾学校幼稚部・小学部における日本語習得に対する指導について」

茨城県立霞ヶ浦聾学校 蛭原けい子(指導教員 四日市章)



【お知らせ】

平成18年度現職教員研修、研修成果報告会及び修了式

日時：3月9日(金) 場所：筑波大学東京キャンパス第1会議室

eラーニングによる講義配信試験の開始

9月からeラーニングによる講義配信試験を開始しました。この配信試験は2種類あります。1つは、現職教員研修の講義の配信で、対象は鹿児島県教育センターで研修を行っている現職教員です。もう1つは、当センターの試行事業であるパッケージ型研修の一環としての「特別支援教育講座」の講義配信で、対象は沖縄県立八重山養護学校と鹿児島県立大島養護学校です。前者は週に約1度、後者は月に1度、行っています。

パッケージ型研修は、2会場合わせて150名ほどの受講生があり、当該養護学校の職員の他、地域の小中学校、保育士等、様々な方が参加されています。第1回は奄美大島会場から本センターの瀬戸口教諭の講義を、第2回は



北海道名寄市立大学から北村博幸先生の講義をそれぞれ配信しました。3回目は沖縄県石垣島八重山から、附属大塚養護学校の安部博志先生の講義を配信しました。各拠点の回線の状態によって、雑音が入ったり映像が途切れたりといったトラブルはいくつか起こっていますが、それにも増してそれぞれの地域にいたまま講義が受けられることに対する成果が期待されています。これらの配信試験を通して、現職教員研修事業の発展性を確認していきたいと考えています。

「筑波大学特別支援教育研究」の発刊

待望の「筑波大学特別支援教育研究」（センター紀要）が発刊されました。執筆してくださった各附属学校の先生方、ありがとうございました。発刊予定時期から大幅に遅れてしまいましたが、第1巻を無事発刊できたことは附属学校の先生方をはじめ、皆さんのご支援の賜です。各機関および執筆関係者には、送付させていただきました。また、まだ残部が少々あります。ご希望の方はご連絡ください。

附属障害5校がテレビ会議システムでつながりました！

9月、附属障害5校各校は、上記のeラーニング事業で使用しているテレビ会議システムによってつながりました。それぞれの学校によって回線状況が異なっており、回線スピードがやや遅いところ、プロキシ等セキュリティが強いところについては、やや制限が加わる可能性があります。今のところ、本センターとの1対1での接続テストでは大きな障害は起こっていません。附属聾学校からは、月曜日に行っている鹿児島県教育センターを対象とした講義を配信してほしいという要望があり1回配信を行いました。

10月13日の特別支援教育研究センター5部門会議は、このテレビ会議システムを使用して行いましたが、聾学校でのトラブルへの対処に時間がかかり大幅に会議の開始時間が遅れることになってしまいました。また、会議進行についても不慣れな点が多く、ご迷惑をおかけしました。今後、経験を重ね、各校がこのシステムを使いこなしていくスキルを身につけていくことができればと思います。

このシステムは、センターを介さず、それぞれの学校同士でもつながることが可能です。資料の交換あるいはビデオカメラやデッキをつないだカンファレンスも可能ですので、どしどしご活用ください。

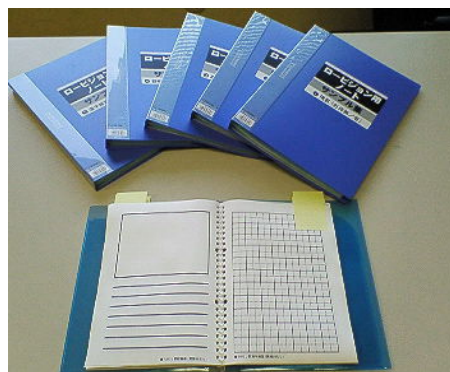
ロービジョン用ノートサンプル集のご紹介

見え方が様々なロービジョン児童・生徒は、その見えにくさを改善する目的でルーペや単眼鏡・拡大読書器などの視覚補助具を使用しています。見えないものや見えにくいものをより「見やすく」するためには、こうした補助具類が有効ですし、たくさん市販もされています。でも、一人一人の見え方に合わせた「書きやすい」あるいは自分の書いた文字が「読みやすい」ノートに関しては、あまり研究がなされておらず、市販のものも種類が少ないといった問題があります。

こうした現状の中、「ロービジョン用ノートサンプル集」は、個々のロービジョン児童・生徒が自分自身の見え方に合ったノートを見つけ出し、使用目的ごとに自分自身でもノートを作成できるように考案されました。

このサンプル集では、様々なパターンのノートの「コピー原紙」を用意しています。サンプル集の選択肢は、罫の太さが0.4ミリから2.0ミリまでの9種、罫と罫の幅は10ミリ・15ミリ・20ミリ・25ミリの4段階に分かれています。また、罫の種類も縦罫・横罫・原稿用紙、その中でも外枠のあるものやないもの、目盛り入りのものなど、基本サンプル集だけで216種類あります。なお、オプションとして観察用紙・漢字練習用紙・方眼用紙も用意しました。【基本編（横書き用／横書き用）】と【オプション編】のサンプルをすべて合わせると、360種類にのびます。

ロービジョン児童・生徒のいるご家庭、盲学校や弱視学級などだけでなく、このサンプル集が一部の軽度発達障害の子どもたちにも有効であるとの評価もいただいておりますので、支援ツールの一つとして是非一度ご試用下さい。（問い合わせ先—特別支援教育研究センター雷坂まで）



【主催セミナーのお知らせ】

今年度最後の主催セミナー「特別支援教育の最前線（6）」を3月25日に行います。テーマは「移行支援」です。各附属障害5校からそれぞれ特徴ある移行支援をご紹介いただきディスカッションしたいと思います。現在詳細を企画中です。5部門会議で最終的に詰めていきます。1月にはご案内したいと考えています。

【特集】

学校間連携の事例（センタースタッフの動向を中心に）

今後の特別支援教育で求められるセンター的機能の重要なキーワードの一つは「連携」だと考えられます。附属障害5校はこれまでそれぞれの学校が授業実践や研究に取り組んできており、大きな成果を上げてきています。しかし、これらの多くは単独の学校としての成果であり、必ずしも学校間で共有されていたとは言えません。当センターは、こうした学校間連携の橋渡しが一つの大きな役割だと考えてきました。

現在、各校には重複障害児が在籍していたり、教育相談で受け付けたりしています。当センタースタッフが定期的に関わっている事例や連携研究テーマは以下のとおりです。

聾学校との連携・支援（弱視聾ケース視覚アセスメントおよび歩行指導、情報教育など）
 桐が丘養護学校との連携・支援（肢体不自由ケースの視覚アセスメントなど）
 大塚養護学校との連携・支援（肢体不自由を併せ持つ知的障害児への自立活動支援）
 大塚養護学校との連携・支援（聴覚障害を併せ持つ知的障害児への観察および支援）
 久里浜養護学校との連携・支援（ケースカンファレンスおよび授業研究）

その他、センターで把握しているものとしては、聾学校で教育相談を受けている視覚聴覚障害乳幼児について盲学校教員の支援を受けています。まだ狭い範囲の連携ですが、各校にいる幼児、児童、生徒について、あるいは今後受け入れていく重複障害児に対して、それぞれの専門性を活かした連携の中で個に必要な支援が展開できるようになることを目的にしています。

【現職教員研修生、研修日記】

「コーディネーターに指名されたけど、地域支援ってどうすればいいの？」そんな時期に千葉県長期研修生として1年間、筑波大学特別支援教育研究センターで研修する機会を得ました。4月からセンターの先生方の講義を聴き、附属盲・聾・養護学校で地域支援の実際の様子を見学・演習させていただいています。特に週1回通っている大塚養護学校地域支援部では、ケースの支援にあたる先生方の相談者を思いやった対応や3人がチームになって前向きに明るく支援している様子に支援の基本を学んでいます。在籍校に戻ってから状況は違っても、相手の身になることや独断でなく学校として支援することを心がけたいと思います。また、どの先生方も問いかけると必ず親身になって答えてくださることに感激し、学校に戻ったらどんなに忙しくても、子どもはもちろん同僚にも親身に穏やかに対応しよう！と、わが身をふり返っています。先生方、ありがとうございます。

（市川市立養護学校 永井節子）



センターの研修生としての私の、桐が丘養護学校での研修の様子をご紹介します。朝、登校すると「デスクがないとご不便でしょうからお使いください。」私のお世話係ともいうべき K 先生が、机の上に積み上げられた山のような教材教具を片付けた後に提供してくださったデスクにどっしりと座ります。夏場は蚊が多いのが難点なのですが、かゆがっているとどなたかが虫さされの薬を貸してくれるので大丈夫です。気のせいかもしれませんが、他の薬より効き目がいいようです。

午前中の授業も終わり給食の時間には、子どもたちとともに、しゃきしゃきサラダやふわふわパンを食べます。牛肉の嫌いな Y 君は牛肉をにらんで考え込んでいます。みかんのきれいな M 先生は今日は頑張っって食べ、「先生はみかんを食べたぞ」とアピールしつつ Y 君を励ましています。ふたりともファイト！

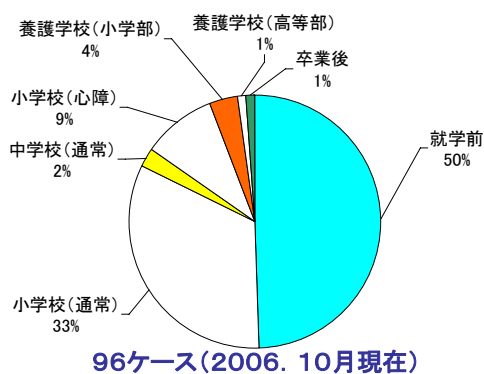
（千葉県立袖ヶ浦養護学校 岩佐美奈子）



【支援部の紹介コーナー】 —このコーナーでは、附属障害教育5校の支援部の活動を順に紹介していきます—

大塚養護学校 支援部

ケースの所属(インテーク時)



支援部の活動

2003年度から3名専任でスタートしました。文京区を支援圏域に、これまでに96のケースの相談・支援に奔走してまいりました。

教育委員会をはじめ、療育・福祉・労等働各機関や園・小中学校と連携を図りながら、特別支援教育の在るべき姿を模索してきました。

ケースの半数は就学前というわけで、今後は就学前の相談・支援の在り方を追究していきたいと考えております。

自転車で走る!

コーディネーターは機動力が命!
坂が多い土地柄、せめて電動機付自転車が欲しい!
ささやかな願いが叶って、買ってもらいました。
リュックサックには、行動観察シートや教材のサンプルがギッシリと詰まっています。
『自分たちを待っていてくれる人がいる・・・』
そう思うと、ペダルをこぐ足にも力が入ります。



本を出しました!

『子どもと家族を支える特別支援教育へのナビゲーション』

(明治図書. 2006) 柳本雄次・前川久男監修

本書は、地域の中でコーディネーターや関係する人たちが、子どもや家族を支援していく道筋やアイデアを分かりやすく示したものです。

子ども達への支援は決して平坦な一本道ではありません。子ども達への支援の目的地が明らかとされ、そこまでの道筋が検索され、よりよい支援につながることを願ってやみません。

ご購入は、以下のホームページからどうぞ。送料ゼロで即日発送されます。

<http://www.meijitosh.co.jp/> (明治図書オンライン)

編集後記

このSSERC通信も3号目。テレビ会議システムも繋がるようになり、これらを通して、センターと附属学校間の連携や、意思の疎通も、より良い方向に向かっていければ、幸いと思います。(K. T)

この通信は、理想科学工業(株)の、RISO-ORPHISで印刷しました。